すを主とする故に、卽材を伐取る事を山と云て、杣人の材を伐初るを山口と云、又材を造る斧を山多豆と云、これらみな山とは材につきて云り、此は其伐出すべき材の繼苗を生ずる地なるを以て山代と云り、萬葉に開木代とも書るは此義なり、開木は代と離して意を取るときは、材を伐出す意にて山なり、又代に連れて意を取るときは、材を生立る繼苗の意なり、何れに取ても此にかなへり、されば此繼苗生の考を以て、かの開木代と書る義をも相明すべし、されば此枕詞は、繼苗生之山代と云意につゞけたるなり、然る昔より萬葉に、次嶺經と書るに依て、續きたる山を經てゆく由に解來たるは當らず、まづ次嶺と云言も、いかゞなるうへに、山城國は大和よりたゞ程近き山一重をこそ越れ、さいふばかり續きたる山を經て行國には非るを、いかでか然は云む、さて山代は、本より一國の大名にてもあるべけれど、又思ふに、始はかの繼苗生を云、山代より負る一郷などの名にてもありけむ、本より一國の名にても、此枕詞のつゞけの意は同じことなり、

〔萬葉集十三問答〕次嶺經、山背道乎、人都末乃、馬從行爾、己夫之、步從行者、〇下略

〔萬葉集七雜歌〕旋頭歌

開木代、來背社草、勿手折、己時、立雖榮草、勿手折、

右柿本朝臣人麻呂之歌集出

〔萬葉集略解七〕卷十一にも、山しろと云にかく書たり、聖武紀天平十七年正月、云々乍遷新京、伐山開地以造室なども有て、林を開て材をとるべき所は山なれば、開木にてやまとよむべし、

〔倭訓栞前編三十四也〕やましろ　日本紀に山背と書り、大和國の北にあるをもて名とす、延暦中に山城と改めさせられしは、國の形勢による也、山代とも書るは訓を借る也、萬葉集に開木代と書るは、義をもてよめる也、杣をそまとよめるが如く成べし、大和本紀に、總て材木を採所を、杣人の諺に山開といへば、山城も材木を取し所歟と見えたり、雍州と稱するは、西土洛陽雍州に在るをもて也、俗に山に在るの城をいふには、しを濁れり、

〔古事記傳七〕山代國造、名義は書紀に山背と書る字の意うしろのうを省くなるべし、此國は大和國の北方の山の後なればなり、